

# 日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所  
162-0805 東京都新宿区矢来町 65  
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175  
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

## プレ宣教協議会に向けて

プレ宣教協議会実行委員長 主教 谷 昌二

宣教150周年を迎えた日本聖公会では、宣教師たちによってもたらされた宣教・伝道への大きなエネルギーが十分に継承されず、日本社会に住む者としての信仰の表現を、いまだ十分に見出せずにいるように思えます。信徒数、教役者数の減少、会衆全体の高齢化等と一朝一夕には解決出来ない問題を抱えており、各地で司祭不在の中、数人の信徒で主日礼拝を守り続けている教会も数多くあります。その方々の熱心なご奉仕に感謝し、主の特別な祝福を祈ります。しかし、このような状況の中でも、若い方たちの熱心で活発な集いが、全国青年大会をはじめ、各地で続けられてきました。(中略)

今、わたしたちは、この150年間に与えられた大きな恵みを振り返りながら 成し遂げてきたこと、しようとして出来なかったこと、そしてまた気づかずにいた多くのことを思い巡らします。(日本聖公会宣教150周年記念 主教会教書より抜粋)

2012年に日本聖公会宣教協議会を開催することと、その準備の一環としてプレ宣教協議会を2010年に開催することが、2008年の第57(定期)総会で決議されました。この8月18日～20日、そのプレ宣教協議会が、箱根スコレプラザホテルで開催されます。

先ず、このプレ宣教協議会に向かっでの準備のために、2009年1月、各教区の常置委員長と宣教担当者に集まっていたいで、懇談の時を持ちました。次の三つの質問への応答をもって、11教区の現状を報告を聞き、分かち合いをすることができました。

- 1 あなたの教区の現在直面している課題は？
- 2 これから取り組もうとしている宣教課題は？
- 3 日本聖公会全体で分かち合いたい宣教課題は？

さらに、同じ質問を管区の諸委員会に出し、応答をいただいておりますが、そのレポートがまとめられています。今回、そ

## □会議・プログラム等予定

(前回報告以降追加  
および7月25日以降)

- 6月  
28日(月) TOPIK作業会
- 7月  
1日(木) 宣教150周年記録作成小グループ作業会  
15日(木) 宣教150周年記録作成小グループ作業会  
25日(日) ～27日(火) 各教区青年担当者会(箱根スコレプラザ)  
26日(月) ～27日(火) 聖公会・ルーテル教会協議会(ナザレ修女会)  
27日(火) 正義と平和委員会  
28日(水) ～29日(木) 総会書記局会  
29日(木) 教区間協働担当デスク  
29日(木) 人権担当者会
- 8月  
5日(木) 管区第2小管区審判廷会議  
5日(木) プレ宣教協議会実行委員会  
11日(水) ～16日(火) 第5回日韓聖公会青年セミナー(長崎)  
18日(水) ～20日(金) プレ宣教協議会(箱根スコレプラザ)
- 9月  
2日(木) 正義と平和・日韓協働プロジェクト  
2日(木) 正義と平和・日韓協働プロジェクト  
8日(水) 広報主査会  
8日(水) 宣教150周年記録作成会  
9日(木) 文書保管委員会  
14日(火) ～16日(木) 管区共通聖職試験  
17日(金) 財政主査会  
27日(月) ～29日(水) 人権セミナー  
29日(水) 常議員会
- 10月  
5日(火) 聖公会/ローマ・カトリック教会合同委員会  
6日(水) 管区共通聖職試験委員会

(次頁へ続く)

れをもとにして取り上げたものを、10の課題としてグループの話し合いのテーマとしました。1. 貧困 2. 高齢社会を迎えて 3. 正義と平和 4. 社会的少数者(障がい者、性的少数者) 5. ストレス社会と心のケア 6. 青少年・子ども 7. 宣教の担い手を育てる 8. 教区・教会の財政 9. 礼拝と祈りの生活 10. 組織・教区間協働。主題講演は、西原廉太司祭による「聖公会が大切にしてきたもの」です。そして、「日本社会の現状」について、野村アセットマネージメント経済調査部長・榊 茂樹氏の講演があります。

このプレ宣協議会の目的は、2012年の宣教協議会に向かつての課題を集約することです。日本聖公会の各教区・教会の現状をしっかりと認識し、分かち合い、その課題にどのように向き合い、それぞれの教会が、いきいきとその宣教課題に取り組むことができるのか。まずは、その課題を集約することが目的です。

大事なことは、プレ宣協議会で出され、集約された課題を受けて、是非、各教区でそれぞれの宣教協議会を開催し、その課題を十分に分かち合い、話し合い深めていただいて、2012年の宣教協議会に持ち寄っていただきたいのです。

さて、これら今直面している教会の宣教課題に取り組もうとする時、私は、今年の聖霊降臨日の特祷を祈りながら、宣教とは何か、改めて示されました。

“全能の神よ、この日あなたは、約束された聖霊の降臨によって、すべての民族、国民に永遠の命の道を開かれました。どうか福音の宣教によって、この聖霊がますます世界に注がれ、地のはてにまで広がりますように、聖霊の一致のうちに父と一体であり、世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン”

神は、主イエス・キリストの降誕・受難・復活・昇天、そして聖霊の降臨によって「すべての民族、国民に永遠の命の道を開かれた。」この神のみ業を宣べ伝え、この永遠の命を、すべての民と共に喜び、分かち合うこと。これが私たちに託された“福音の宣教”の働きの原点であること。この神の命は、いわゆる“教会内”に

(前頁より)

19日(火)～21日(木) 主教会(大阪)

<関係諸団体会議等>

7月20日(火) NCC改革委員会

8月9日(月)～11日(水)

日本聖公会関係学校教職員  
研修会(名古屋)

10月12日(火)～14日(木) 日本キリスト教連合会研修会(箱根スコレプラザ)

のみに閉じ込めるものではない。

現代社会では、資本主義経済の力が、世界のすべての民族、国民を抱きこんで、激しい競争を展開しています。この競争に勝つことだけが至上命令となり、逆に、敗者は、どんどん振り落とされ、見捨てられ、膨大な弱者の群れが広がり、命が危ういところに追い込まれているこの現実。私たちは、これをどんな視点で直視していくことができるのか。大きな課題を突きつけられているのではないのでしょうか。

この厳しい状況の中で、まずは、私たち主イエス・キリストへの信仰の恵みに預かっている者が、神の命、永遠の命に生かされている喜びを確信し、感謝・讃美の礼拝を捧げ、日々この命に生かされる生活を確かなものにする。そして、未だこの命に生かされることの自覚のない人達に、“あなたにはもう既に、神の命が与えられていますよ”とのメッセージを伝えて行く。特に、命の喜びを妨げられている人にこそ伝え、その妨げているものを取り除く働きを共にする。

神からの宣教の使命を与えられている者が、宣教に向かう相手であるその人々と、実は同じ命に生かされていること。この認識から出発できればと思います。

“神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。” ヨハネによる福音書 3:16



## 平和宣教教育活動資金の創設

— 平和を実現する者となっていくためにも —

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤牧人

第58(定期)総会が終わり、新しい総会期に入って、日本聖公会の働きが始まりました。といってもそれは全く新しいことの始まりというのではなく、今まで行ってきた事柄の積極的な継続と新しい課題の始まりということだと思います。

その中のひとつをご紹介します。それは『平和宣教教育活動資金』という新しい資金が管区に創られた、ということです。この資金を有効に活用していただきたいがために、その思いを皆様にお知らせいたします。

「過去を記憶できない者は、その過去を繰り返す運命を負われる。」という識者の言葉があります。これの短縮形が「歴史は繰り返す」ということです。

平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる(マタイ5:9)と言われたイエス様の教えを実践していくとき、この識者の言葉は大きな意味を持って迫ってくるのではないのでしょうか。

その意味で、日本には(も)とてつもない大きな過去があり、それを記憶することができる事実があります。沖縄、広島、長崎。もちろんそのほかにも各地には平和を現実のものとするために知るべき様々な過去の出来事があります。これらに目を向け、心に向け、その事実は何を語っているのか、その真実は何であったのかを、見出していくことの大切さを思うのです。

殊に、その大切なことを中高生またその年代の方々に、体験してもらいたい、現場に行ってみてもらいたい。そして、今もまた将来もイエス様が言われる「平和を実現する人」になっていてもらいたい。そんな思いをもってこの資金の創設が提案され、可決されました。

私は、今年の6月に行われた「沖縄週間・沖縄の旅」に参加してきました。この企画に参加したのは3回目ですが、毎回思うことは、現場を見ることの尊さです。沖縄戦の現場を見るとき、そこが語りかけてくることの重さ、また、せつなさ、そして、あらたな誓いに身が緊張します。

「茶色の朝」という本があります。(\*)これは、寓話で、「仕方がない」とやり過ごしている、何かがおかしいと思っているのに、と過ごしていると、すべてが「茶色だけ」になってしまう物語です。それ以外の色を持つあらゆるものが消し去られてしまうのです。フランスで出版された本で、フランスの読者にとって茶色はナチスを連想させる色なのです。それはさらに広がり、ナチズム、ファシズム、全体主義ということを連想させているものとなっているのです。「茶色」に変えていく力がひたひたと忍び寄ってくるがその意図に気がつかない。気がついた時にはすべてが茶色に変えられていて、もはや反抗もできない……。

(\*)茶色の朝 フランク・パヴロフ：物語  
藤本一勇：訳 大月書店：発行

平和を現実のものとする、すなわち神の国の実現を目指していくとき、この本が教えてくれる意味深さを理解していただきたいと思うのです。

難しいことは言いません。中高生の皆さん、またその年代の皆さん、どうかこの資金を活用して、「過去を記憶する」尊い経験をしてみませんか。また周りの方も彼らに勧めてみていただけませんか。そして共にイエス様が教える平和を実現する者となって行き、生きたいと思うのです。

### 平和宣教教育活動資金規程（一部抜粋）

#### 第1条（名称）

この資金は、「平和宣教教育活動資金」と称する。

#### 第2条（目的）

聖公会信徒の中・高生およびその年代の者の平和宣教教育活動のためのプログラムへの参加支援を行うため。

#### 第3条（使用の対象）

この資金から支援を受けるのは、以下の者とする。

- ① 聖公会信徒・求道者の中学生・高校生、およびその年代で、牧師または教区の推薦を経た者。
- ② 上記の者で付き添いが必要な場合の付き添い者1名。

#### 第4条（使用の手続き）

使用の対象者と使用金額については所定の願書を総主事に提出し、主事会議で決定する。

#### 第7条（施行）

この規程は2010年の日本聖公会第58（定期）総会終了の時から施行する。

<さらに詳しいことは管区事務所にお尋ねください。>

#### □常議員会

第58総会後第1回、2010年7月15日（木）

主な決議事項

1. 常議員会書記選任の件  
司祭 輿石 勇を選任
2. 管区事務所主事推薦承認の件  
総務主事：阪田隆一（専任）、渉外主事：八幡眞也、財政主事：尾崎茂雄、宣教主事：執事 中村 淳、広報主事：鈴木 一
3. 第58（定期）総会期諸委員選任の件<氏名次号掲載予定>
4. 次回以降の会議  
2010年9月29日（水）、11月30日（火）

#### □各教区

東京

- ・7月19日（月）第112（臨時）教区会—教区主教選出の件 聖アンデレ主教座聖堂 2名の候補者が推薦され、11回の投票が行われたが、当選者は得られなかった。
- ・聖職按手式 9月4日（土）10時 聖アンデレ主教座聖堂 司祭按手 志願者：執事 マツテヤ大森明彦、執事パウロ中村淳

†逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

- ・ナタナエル いなむかいあきぞう 稲向秋造（中部・元伝道師・退職）2010年6月27日（日）逝去（91歳）

□お詫び 先号において固有名詞の表記に関して不注意による誤字（漢字変換ミス）があり、関係者にご迷惑をおかけいたしましたことをお詫びいたします。

### 《人 事》

東京

聖職候補生ジョン・ストーゼンバック

	2010年6月19日付	聖マーガレット教会勤務解任
	2010年6月20日付	聖オルバン教会勤務命令
聖職候補生 セシリア下条知加子	2010年6月30日付	月島聖公会勤務解任
	2010年7月1日付	特定非営利活動法人「きぼうのいえ」職員として週4日勤務命令 月島聖公会主日勤務命令

### 横浜

司祭オーガスチン中山統永(退)	2010年6月8日付	ベタニヤホームチャプレンを委嘱(2011年3月31日まで)
-----------------	------------	-------------------------------

### 京都

司祭 ヨハネ井田 泉	2010年7月10日付	京都聖ステパノ教会管理の委嘱を解く。
執事 サムエル奥 晋一郎	2010年7月10日	司祭に按手される。
司祭 サムエル奥 晋一郎	2010年7月10日付	京都聖ステパノ教会牧師補の任を解き、京都聖ステパノ教会牧師に任命する。
司祭 シモン <sup>イム</sup> 林 <sup>ヨンイン</sup> 永寅	2010年8月1日付	大韓聖公会ソウル教区からの宣教協働者として受け入れる。 岸和田復活教会副牧師に任命する。
執事 マタイ出口 創	2010年7月31日付	主教座聖堂付の任を解く。休養期間を終えるものとする。
	2010年8月1日付	彦根聖愛教会牧師補に任命する。

## 沖縄週間／沖縄の旅を終えて－成果をかえりみる

正義と平和委員会 沖縄プロジェクト 司祭 マルコ柴本孝夫

今年も沖縄週間／沖縄の旅を無事に終えることができました。このプログラムの始めから終わりまで常に導いてくださった主に、また祈り支えてくださったすべての方々に感謝します。

旅の企画・実施に携わった者としては、大きな事故もなくプログラムが終了すれば、やはりほっとするのですが、しかし他方この一回でどれほどのことができたのか、主の平和実現という大目標に向けいったいどんな歩みとなったのか、真摯に省みる必要を感じさせられています。

さて、いきなり私自身の感想から記させていただければ、今回とくに印象的だったことは、まず伊江島の豊かな自然に触れたことでした。中でもフィールドトリップで訪れた城山(ぐすくやま)、通称「伊江島タッチュー」の頂上から

見た360度の風景、また島の名所でもある海岸「湧出(わじ)」からの眺望は、いずれもまさに息を飲むほどの絶景でした。思わず天地創造の時に神さまが語られた「見よ、それは極めて良かった」の言葉を思い起こしました。

梅雨が明けて間もない心地いい気候のおかげで空も海も遠くまで青く澄んでおり、あざやかな光に包まれた自然の美しさの中に浸り、心身ともに癒されるひとときでした。

これは伊江島に限らず沖縄が今も生命力溢れるところであり、神さまが創造された素晴らしい自然が息づく場所であり続けているからこそだと思います。しかしその反面、沖縄そして伊江島の多くの部分が、じつは今なお軍事利用され、自然またあらゆる命が傷つけられている

現実があることもあらためて思い知らされました。

もう一つ印象的だったのは、わびあいの里での体験でした。わびあいの里は、沖縄戦終結から40年目の1984年6月23日に阿波根昌鴻(あはごんしょうこう)さんたちによって開設されました。この「わびあい」とは、家庭も社会も国も平和で豊かに暮らすためにはわびあいの心によってしか実現しないとの阿波根さんの信念に基づき、若き日に学んだ京都の一燈園で実践されている「三詫びあい」から名づけられた、と言われていています。阿波根さんは、里で障害者に仕事を提供するとともに、人々が土に親しみ、人間形成、交流の場となる「福祉村」づくりを目指しました。

今回短時間での慌ただしさの中でしたが、この場所も訪問することができました。私たちが到着すると、さっそく反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」のすぐ手前にある広間に通され、ここで暮らす謝花悦子(じゃはなえつこ)さんから、伊江島のこと、また長らく阿波根昌鴻さんと取り組まれた「土地闘争」などについてお話を伺うことができました。終始とてもやさしく、しかし同時に力を感じる語りでした。

私はこれまで幾度かこのわびあいの里を訪れたことがありますが、10年以上前に訪問した際は阿波根さんがまだご健在で、ご本人から直

接お話を聴くことができました。阿波根さんをぐりと取り囲むようにしてその話に耳を傾けました。そして今回はちょうど阿波根さんがおられた位置に謝花さんが座り、語って下さいました。時の流れを感じると共に、しかし阿波根さんの思いや生き方は確実に引き継がれ、今、謝花さんが語っておられる姿に大変感動しました。私たちがまた、じつは大切な働きを「引き継いでいくために」このところを集められたのではないか、そんな思いにさせられました。

今回の旅の概要は、6月18日から21日までの3泊4日間を、テーマ「命どう宝(ぬちどうたから)～共に、キリストを生きる～」のもとに集い、またテーマ聖句エフェソの信徒への手紙第2章14節からの「キリストは、敵意という隔ての壁を取り壊し…」のみ言葉を心に留めつつ過ごしました。

参加者数は、日本聖公会8教区から35名、地元沖縄教区から18名、他教派から2名、そして大韓聖公会から4名とアメリカ聖公会から1名の参加者をも迎え、総勢60名での旅となりました。リピーターの参加者たちをベースとし、毎回必ず新しい顔も加えられ、とくに今回は他教派また大韓聖公会やアメリカ聖公会からの参加者も得て、ますます関係の広がりを与えられつつ、共に過ごせたことは大きな喜びでした。

プログラムの大まかな流れとしては、初日、各地から到着後伊江島へ。その夜は地元で活躍されているお二人、島内ガイドの島袋萬英(しまぶくろまんえい)氏と、次に村議会議員で「唯一の野党議員」である名嘉實(なかみのる)氏の講演を聴きました。

翌二日目は、午前中より伊江島を巡るフィールドトリップへと出かけました。アハシャガマ、芳魂之塔など。城山では一部の人は伊江島タッチューの頂上まで登り美しい景色を眺めました。昼食後「わびあいの里」へ移動。ここで謝



伊江島タッチューからの眺め

花悦子氏のお話を聴き、反戦平和資料館「ヌチドゥツカラの家」も見学。その後再び島内を巡り、アーニーパイル記念碑、湧出(わじ)海岸、リリーフィールド公園など訪問。そしてフェリーで本島へと戻り、分宿先の教会へと分かれ、交わりのひとときを過ごしました。

三日目は、各教会での主日礼拝の後、北谷諸魂教会での沖縄教区「慰霊の日」礼拝へ再び全員が集まりました。礼拝後、沖縄教区谷昌二主教による「日韓併合100年について」の講演を聴きました。これは今年この大切な節目にあたり、韓国からの参加者と共に学ぶひとときでした。夜、三原聖ペテロ聖パウロ教会での交流会。上原司祭家族によるバンド演奏や大韓聖公会の参加者による合唱も披露され、賑やかに過ごしました。

最終日四日目は小祿聖マタイ教会での分かち合いの時。グループそして全体での分かち合い、さらにアメリカ聖公会と大韓聖公会の参加者からのメッセージを聞きました。

このように今年も盛りだくさんの内容でした。これら与えられた出会いが、さらに今後展開していくようにと願っています。「命どう宝」を冠としたテーマを掲げての沖縄の旅は、7回目、通算16回目の16年を数えました。この間、各地から様々な世代、立場の参加者たちが集い、思いを分かち合いつつその輪が広がっている様は、「平和の礎」の形と重なり、「命どう宝」を大切にする平和の波となって広がっているのではないかと考えています。



初日夜の講演会・伊江島のホテルにて

## 「沖縄の旅」参加者の声

### 2010年沖縄週間に参加して

—伊江島・唯ひとつの高見の塔から見たもの—

沖縄教区

三原聖ペテロ聖パウロ教会 富本盛彦

唯一つの高みとなっている城山(立塔・タッチュー)から見下ろす平坦な島は、穏やかに眺望に富み、西には東シナ海の遙かな水平線までの広がり、東には本島の山並が望まれて見る人を飽きさせない。嘗てこの島でも激しい戦闘があり海上からの艦砲射撃で「鉄の暴風」が荒れ狂い、集団自決もあり4,800人余が戦死したとは思えない穏やかさに複雑な思いを禁じえません。米海兵隊の補助飛行場と射爆場がありながら、私達が島内滞在中は訓練の様子も

見えず、砲弾の音も聞こえず静かな島でありました。

この穏やかな島で65年前に起きたこと、戦後の銃剣とブルドーザーで象徴される土地収奪への反戦地主の抵抗運動、飴と鞭で象徴される現在を学ぶことが出来ました。これまで沖縄週間「沖縄の旅」では本島内の戦跡を主に平和学習を続けて来ましたが、本年は久し振りに離島の激戦地での学びの旅となりました。参加者数は60名(本土37名、韓国4名、米国1名、沖縄18名)で、これまでになく多くの参加が得られました。

今年の「沖縄の旅」の特徴は、離島(伊江島)での平和学習、大韓聖公会と米国聖公会からの参加者があったこと、日本基督教団からも2名の参加者がおられたことが挙げられます。韓国と米国からの参加者がおられたのは、

2011年に沖縄において第二回世界聖公会平和大会の開催が計画されており、その準備のための事前学習を兼ねてのことでありました。共に交わりと学びの時を分かち合うことが出来たのは、喜ばしいことで、その時に向けて良き成果が期待されます。韓国、米国の方々からメッセージを頂き、共に祈りが出来てよかったという感想を伺っています。李 善徳司祭はお互いに自国内の一般的な風評に引きずられて固定化する先入観で相手を判断することのマイナス面を、ご自身の体験から語られました。

この沖縄でも戦時に10,000人を超す朝鮮の方々が強制的に使役され、多くの戦死者が出た事実を思うとなんともやり切れません。過去の過ちが謝罪されないまま今日に至っている現実を背負い日韓併合100年を問わなければならないでしょう。本年6月の第58(定期)管区総会において、2011年から2014年までの「沖縄週間」設置の件が可決されましたが、その時「一人一人の問題であり沖縄で何かしているんだというだけでなく、沖縄の教会の問題ではなく、各教区、各教会の信徒一人一人が考えて活動していくべきものである」との承認を促す意見があったことを申し添えておきます。継続による達成度がどの位になるかは予測し難く、希望あるのみで見えない成果ではありますが、それは参加者が学んだこと、感じたことを各教区、各教会に持ち帰り、語り、広め、関心を啓発することにかかっていると思います。

リピーターの固定化、新規参加者数が伸びない現状ではありますが、平和を希求するキリスト者の具体的な学びの場としてキリストが指し示す平和を思い、そのことに則ったプログラムによって過ごす「沖縄の旅」の継続は維持されなければならないと思料します。



フィールドトリップでガイドの説明を聞く(伊江島)

普天間基地移設が現政府によって辺野古案に固定化されている中で、キリスト者でなくとも現状を憂いて本土からわざわざ来島し沖縄の平和運動に参加する人達が増えています。キリスト者は尚更「主の平和」実現のために心一つにして「沖縄」を、「基地」を、「平和」を学ぶための活動の一環として「沖縄週間」を重視すべきものと思います。「命どう宝～共に、キリストを生きる～」の主題の下、沖縄に集い、主の平和に向けて歩み分かち合った4日間であったことを主に感謝したいと思います。

### 平和への祈りを深める「沖縄」

横浜教区

清里聖アンデレ教会 藤森 晶乃

先日参加させていただいた「沖縄の旅」は、私にとって初めての沖縄でした。空港を降りてすぐに衝撃を受けました。冷たさを感じる基地が見えたからです。昨年参加された先生にも、一昨年参加された先生にも話を聞いてはいましたが、それでも沖縄のことをほとんど知らなかったのも、戦車や戦闘機を初めて目の前にし、私は、その景色から一瞬目を覆いたくなくなってしまったほどでした。

旅の中でも印象に残ったことは、[ガマ]を目の前にした時でした。外から覗くとその穴の中

は真っ暗で・・・その[ガマ]では150人の方が集団自決をしたと聞きました。後で教えていただいたのですが、[ガマ]の中は目の前に手を出しても見えないほど暗いと聞きました。そ



の中で爆撃音を聞き恐い思いをしながら死ぬしかない」と心に決めた方たちのことを思い胸が苦しくてしかたがありませんでした。

教会分宿の日に三原聖ペテロ聖パウロ教会の上原司祭さんの子どもさんから、『「集団自決」と言う言い方はもうしない、なぜなら赤ちゃんは自分で死を選ばない。だから「集団強制死」なんだ。』そう教えていただきました。確かにそうだ、とその言葉が心に残り、そして今沖縄で学んでいることを教えていただくことができ本当に良かったと思いました。

そしてもう一つ特に心に残っていることがあります。それは沖縄の方々の優しさです。冷たさを感じる基地や、それを抱える苦しみの反対側に感じたぬくもりや明るさがとても印象的でした。辛い思いをするとその分ヒトに優しくなれる。私は小さい頃そう教えてもらったことを思い出しました。実は、私は、清里で保育士をしています。今までもニュースや本などで見たことを平和への祈りとして子どもたちとお祈りしてきました。子どもは感受性が豊かなので、ニュースなどで学んだうすい知識だけでもグッと表情を変える子どももいました。でも心の底までしっ

かりと響いていないようで、お祈りに対して不安に思っていました。

沖縄の旅から戻り、[ガマ]の話をした後に子どもたちと一緒に祈りをしたときの子どもの表情や想いが今までと全然違ったように感じました。私自身が沖縄のこと、そして戦争のことを今までより深く感じる事ができたからこそ、子どもたちにも伝わったような気がします。私を感じてきたことをどこまで子どもたちに伝えられるか分かりません。また、保育者が伝えたことを全て受け入れることができってしまう子どもたちだからこそ、どう伝えていこうかと悩んでいます。ただ、子どもたちに少しでも平和への種を蒔いてあげたい、そう思いながら伝えていきます。7月保育園で子どもたちと歌う聖歌は、沖縄の歌になりました。清里の保育園からお祈りする小さな祈りが届きますように。最後に初めての沖縄がこの旅で良かった。そう思います。ありがとうございました。

.....

## 「2010年度在日韓国聖公会出身教役者の集い」に出席して

東京教区 司祭 ステパノ <sup>タク ジウン</sup> 卓 志雄

去る5月10日(月)から12日(水)まで三日間京都にて「2010年度在日韓国聖公会出身教役者の集い」が開かれた。現在18名の韓国出身の教役者が日本聖公会で働いている。今回の集いは、韓国出身という共通点を持っている教役者たちが、日本における宣教活動を振り返り、またこれからの日本における宣教活動について分かち合うために開かれた。18名の在日韓国聖公会出身教役者の内14名、日本聖公会管区から管区総主事相澤牧人司祭、野村潔司祭が、大韓聖公会から金榮一司祭(ソウル教区

教務局長)、李賢宇司祭(ソウル教区教育訓練局)、柳時京司祭が参加された。また植松誠首座主教、京都教区高地敬主教がご多忙の中参加された。

集いの初日は開会礼拝およびそれぞれの自己紹介で始まり、「日本における牧会体験」が丁胤植司祭、李香男司祭の発題によって行われた。今までと異なる習慣、言葉、環境の中で行われている牧会経験と、それぞれの現場での労苦と恵みを分かち合う時間であった。

2日目の朝は植松首座主教のお話から始まった。現在の日本における韓国人教役者の存在は「異質的」であり、同質的存在(日本)の中で異質的存在(韓国人教役者)がいることによって緊張は生じる。しかし学びあい、刺激し合うことによって互いに成長していくことができるのではないかと。また日韓両国の聖公会の関係は世界聖公会共同体の中でも注目され、教会協力の新たなモデルになっており、日本での韓国人教役者の働きは大切な意味を持っていることが強調された。

銀閣寺、南禅寺、祇園、清水寺などを巡りながら雨の京都を味わう昼を過ごした後、金榮一司祭、李賢宇司祭から大韓聖公会の宣教に対する取り組みおよび現状の報告が行われ、韓国において検証され活発に行われている宣教・教育プログラムの日本導入の可能性が打診された。

3日目の朝は内部の組織整備、日韓宣教方策提案、来年度の計画について議論が行われた。この集いは単なる親睦会ではない以上、日本での牧会生活を通して得られた体験、日本の文化、生活、神学、活動などを宣教師の言葉で記録し紹介する作業が必要であること、また日韓両聖公会が在日韓国出身教役者の働きを共有できるようにプログラム、プロジェクト、交流などを組織的に企画することが確認された。

韓国の三つの教区から日本にきて働いている教役者は18人もいる。三日間、皆一つになって日本における宣教活動の振り返り、またこれからの宣教活動のために熱く盛り上がった。しかしそれぞれの違う立場から異なる意見も出た。考えてみると共通点より相違点の方が多い集団かもしれない。韓国の三つの教区から来て日本聖公会の11教区のうち9教区で働いている。また18人のうち10人は管区と管区間の協定によって来られ、4人は管区間ではなく教区

と教区間の協定によって来られた聖職である。残りの4人はいわゆる現地採用、すなわち日本聖公会で聖職を志願したか、あるいは日本聖公会に籍を変えた聖職である。日本に来られたきっかけ、ルート、働きの場所が違うため、その環境、給料、待遇、おかれた牧会的状況も異なる。また年齢、性格、経験、家族構成、日本語の習熟度なども異なる。しかしお互いの違いを体験しながらも日本の宣教を目指す心は一つだと分かった瞬間があった。それは閉会の聖餐式の時であった。皆聖卓を囲んで聖餐式がささげられた。民族的にも、宗教的にも少数者である在日韓国聖公会出身教役者たちにはマタイによる福音書22:41-46を中心とした高英敦司祭の説教を通して福音の力と勇気が与えられた。また人間的な違いは忘れて一つのパンに気づかなかった。陪餐の前である。日本語の式文では「わたしたちは多くいても一つの体です」と唱えるが、韓国語の式文の同じ箇所を直訳すると日本語と少しニュアンスが違う。「わたしたちはお互いに違いますが、一つのパンを分かち合い一つの体になります」。その時、集まった皆は、聖餐式を通して主イエス・キリストにあって一つになることを体験し、神さまに養われ生きて行く力と勇気と知恵をいただき、神さまが望んでおられる愛と平和と正義をこの社会に実現するためにここに呼ばれたことを、改めて考えさせられた。「異」が「同」になる出来事。主イエス・キリストにあってこの地でも実現されるようにと祈るわたしたちであった。

最後に韓国聖公会出身教役者の集いが神さまの導きと恵みによって無事に終わったことを感謝する。そして物心両面からの支援をくださった日本聖公会管区と各教区、またご多忙の中で励ましに来られた日本聖公会の関係者、大韓聖公会の関係者の方々に感謝を申し上げたい。



## 「韓国スタディー・ツアー」に参加して

### —多様な「社会宣教」の現場に学ぶ—

京都教区 司祭 大岡 創

6月7日～11日にかけておこなわれた日本聖公会第2回韓国スタディー・ツアーに参加させていただきました。参加者は6教区7名とスタッフ3名の計10名。さらにソウル教区からイ・デソン司祭が全行程を随行。今回は大韓聖公会大田教区の取り組む社会宣教の現場[全州(チョンジュ)及び大田(テジョン)]を見てまわりました。

大田教区ホージョンソン司祭の「社会宣教と福祉」の講話の中で、韓国の教会の方向性について述べられました。宗教人口は増えているがキリスト教は減少。良いイメージではないらしく「キリスト教は公共の敵?」と揶揄されそれは「社会に対して無関係に教会は活動している」という意味だと言う。そのなかで社会宣教とは何かと問いかけ「自分の信仰を社会にあらわす方向へ」「暗闇の存在する限り教会はここにありべき」「社会化されるべき何かを持つこと」「宣教とは信徒を増やすことではなく、神の国を作るため色々な勇気を育てること」と言われたことがとても印象的でした。さらに初代教会の人々の歴史を紐解きつつ「教会は伝道を通して成長してきたのではなく、信徒の日常生活の姿を見て周りに影響を与えてきた。互いに愛し合い、互いに仕え合うことを学んできた。いつも死と向き合う不安の中で互いに励ましあってきた歴史が今日の姿を作り上げてきた。だからこそ貧しい人々に必要を与えていくことこそ教会の使命。社会化されるべき何かを持つことが信仰。預言者的立場で社会の間違いを正していくこと。活動を通して人間の存在意義を高めていくこと。そのためにいつも体でささげる教会であるべき」ことを強調されました。

金提(キムジェ) 分かち合いの家では低所得者向けの個人の能力にあった雇用創出自活プログラムが提供されていました。縫製ミシンの

提供、公共施設清掃サービス、入院中の介護サービス、移動洗濯サービス、放課後勉強部屋提供(学童?)、在宅介護支援や「フードバンク」=(給食センター等で余った食材を分けてもらい分配する)といったものまで様々なアイデアや企画が駆使され、「やれそうなものからやっていく」「小さいことでも必ず成果を見出していく」「喜びをもって楽しみながら続けていく」ことへの意欲を感じました。

全州(チョンジュ)にある「お年寄りに働き場を提供する」支援センターを訪問。紙を折り畳んで糊づけて買物袋を作る仕事を手際よくこなす方もいれば、効率よりも私にとっての「居場所」だとお見かけする方まで色々あり、お互いの存在を認め合う優しい職場の空気を感じました。

大田(テジョン)ではクオン・ヒヨン教区主教や社会宣教担当者から教区の具体的な活動について何う時が与えられました。家出せざるを得ない危機的状況にある青少年女のための(短期・中期)シェルターとしての支援活動は24時間稼働。短期では3カ月・中期では半年かけて社会復帰や自立支援を行う。アルコール依存、タバコ、インターネット中毒から家庭に戻れるのは4割程度だという。6割の帰れない人たちへの社会復帰支援を「青少年福祉支援法」のもとに行っている。全国120か所にあるシェルターは足りない。その活動を聖公会はいち早く始めたことは評価されているとのこと。

今回、さまざまな「社会宣教」の現場を見ることができましたが、最前線で働いている方々の表情は生き生きと輝いて見えました。イエスさまならどうされたでしょうか?そこに社会と教会の間にある壁を越えていけるヒントがあるように思いました。さらに、経済的貧困、家事労働、家父長制度の中で疲れきった女性たちに

向けた「心身ともに休息すること」の支援プログラムの中では、「共同社会だから脱落者がいる、もう一度やり直すために分かち合うことを大切にしている」と伺いました。支援活動の現実をみると共に「自分の弱さを吐き出せる場がある」「こんな私でもやっていけるのだ」という自信を取り戻していくプロセスの必要性を感じました。

これらの自立支援活動などの企画立案・組織の立ち上げを教会が中心に関わり、実際の運営費や備品購入費用などは国など公費で賄

われるとのこと、詳しく伺うことができませんでしたが、日本でのNPO法人や教会の社会宣教の現場とは随分と隔たりを感じます。

今回の研修を通して「誰のために宣教するのか」「何のために宣教するのか」「現場を知ること」「自分との関わりの中で考えてみること」を考えさせられ、問いかけられました。

多くの学びの機会が与えられたことを感謝いたします。

(宣教局長・和歌山聖救主教会牧師)

### 「バーンサバイ」の近況

タイ北部チェンマイの近郊でAIDS患者のシェルターを運営しているのが「バーンサバイ」です。日本聖公会管区事務所はここ数年間この活動のために支援を続けて来ました(2006年以降現在まで年間10万円を支援しています)。

この度8年間の日本人を中心とした活動(勿論日常の活動は現地の人をお願いしています)を発展的に解消し、タイのNGOであるCAM(タイ・キリスト教団エイズミニストリー)が引き継ぐことになりました(7月1日より)。

CAMとバーンサバイはバーンサバイ開設当初から協力関係にあります。また、新しいバーンサバイの責任者であるサナン・ウッティさんはバーンサバイ財団の理事長をしておられます。従って活動は今までどおり、或いは今まで以上に発展することと信じています。

タイではAIDSに対する治療は改善されていますが、これは一般的なタイ国民に対することで、恵まれていなくてこの恩恵を受けられない人々が多くおられるようです。これらの人々のために活動を継続する新しいバーンサバイを、これからも引き続き多くの皆様が支援して頂けるようお願い致します。

(管区事務所 渉外主事 八幡真也)

### ◆ 日本聖公会プレ宣教協議会 ◆

2010年8月18日(水)～20日(金) 富士箱根ランド 箱根スコレプラザホテル  
主題:「宣教する共同体のありようを求めて」



日本聖公会管区事務所ホームページ: <http://www.nskk.org/province/>  
☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。  
comm-sec.po@nsk.org 広報主事(鈴木)宛て